

## 幼児の自己実現 —社会的行動との関連から—

畠山 美穂<sup>1</sup> 倉盛 美穂子<sup>2</sup> 山崎 晃<sup>3</sup>

### Preschooler's Self-realization: The Correlation with Social Behaviors

Miho Hatakeyama<sup>1</sup>, Mihoko Kuramori<sup>2</sup> and Akira Yamazaki<sup>3</sup>

The purpose of this research was to clarify the relationship between preschool children's self-realization and social behaviors. Addition to this, the developmental change of these relations were investigated. 137 five years old children's self-realization and social behaviors were rated by 4 teachers individually in July and March. The social behaviors were classified into aggressive, depressed and prosocial behaviors. As compared with those children who got low score in self-realization were rated low in aggressive and depressed behaviors but high in pro-social behaviors. The score of self-realization increased as time passed, however, the correlation between social behaviors and self-realization was the same as that of prior rating. These results imply that the social behavior might be partially determined by the factor of self-realization. Further study is needed to examine self-realization from the viewpoint of life-span development.

**Key words:** self-realization, social behavior

幼児は、幼稚園や保育園に通うようになると、家庭とは異なった集団で生活することを余儀なくされ、自分と年齢の近い子どもと対人関係を結ぶようになる。同年代同士の関係においては、幼稚園入園以前の母親を中心とした家族との関係とは異なり、相手にも自分と同じ思いや欲求があることを理解したり調整したりすることが必要とされる。

また、仲間との遊びは、様々な仲間との相互作用に必要な社会的諸能力を身につける機会であると同時に、自分を発揮・表現する機会でもある。このような仲間との遊びを通して、子ども自らがありのままの自分を出しながら、思いや願いを実現することが、幼稚園生活での課題であると言えよう。このようなことから、子どもが遊びの中に自己を没入して自由に遊ぶ姿が、自己実現の姿であると考えられる。

ところで、幼児における自己実現とはいったい何であろうか。幼児の自己実現という概念は、現在のところ一貫した見解がえられていない。そのため、成人の自己実現についての概念から述べることにする。マズロー(Maslow, A)は、自己実現を、現実の認知、受容、思考・感情行動の自発性、課題中心性、プライバシー要求、自律性、様々な物の鑑賞、神秘的経験の有無、同一視の感覚、親密な関係の有無、主的な性格構造、倫理観、ユーモア感、創造性、批判的態度や抵抗の15の観点から捉えている。この観点から、上田(1988)は、自己実現している人の特徴として、「自己や他人、自然をありのままに受け入れる」「自発的で、純粹、自然である」「哲学的で敵意のないユーモアの感覚を持つ」などのいくつかの特徴を、また、山崎(1999)は遊びに独自性があることを挙げている。このような特徴を幼児に置き換えて考えてみると、自発的かつ純粹で、豊かな想像を持ち、ユーモアがあり、良好な仲間関係を構築できるといった姿が浮かび上がる。

1 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期  
2 日本学術振興会特別研究員  
3 広島大学教育学部附属幼年教育研究施設教授

また、自己実現の欲求は、すべての幼児の内に存在する基本的欲求であり、環境との関わりを通して自己実現の基本的能力としてはぐくまれていく(広島大学附属幼稚園, 1991)ものであるため、具体的な自己実現の姿や過程が、幼児一人ひとり異なることがわかる。

そこで、本研究では幼児の自己実現の姿を「自己の内的欲求から生まれ、自らの意思に基づいて選択、決定した行為によって、自分自身の内なる思いや願いを実現しようとする姿(広島大学附属幼稚園, 1991)」と捉えることとする。つまり、友達と心を通わせともに過ごすことに喜びを感じたり、自分の意見を相手に伝え、自分のしたい遊びを遂行したりすることができるといった様々な姿から、自己実現を捉えていくものである。

“幼児の自己実現している姿”を考えた時、幼児個人が主体的に活動する遊びの中に自己実現している姿が現れる。一方、幼稚園での遊びは他者との関わりが必要不可欠であり、仲間との相互交渉も幼児が自己実現する際の重要な要因になりうると考えられる。

ところで、幼稚園での幼児を取り巻く環境の中では、相手を思いやる行動や、自分を主張する行動、時には相手を傷つける行動など、仲間に対して様々な社会的行動が行われる。山崎・白石(1993)は、真の自己実現に至るためには、仲間の中で自らを主張する行動だけでなく、相手や場合に応じて自己抑制的な行動も必要であると述べている。このような仲間との相互交渉の中で行われる様々な社会的行動は、仲間関係を充実させるために必要不可欠であると同時に、幼児が自己実現する際に重要な役割を果たすことが示唆される。つまり、良好な仲間関係にあることが、子どもの自己実現をより一層高いものにすると考えられる。そのため、状況に応じて適切な社会的行動が行われなければ良好な仲間関係を保つことができず、仲間との遊びの中でうまく自己を実現できないと考えられる。Crick(1996)は、向社会的行動が少なく、攻撃的で抑うつ的な子どもは、仲間の中で不適応状態に陥る場合があることを報告している。従って、攻撃行動や抑うつ的で不適応状態にある子どもは、仲間の中で適応している子どもよりも自己実現の程度が低いことが予測される。

また、幼児期は身体的・認知的発達著しく、様々な社会的能力をより発達させる時期である(藤崎, 1992)。よって、自己実現も加齢に伴って発達するものと考えられる。

以上のことから、本研究では社会的行動と自己実

現との関連を発達的に検討することを目的とする。そこで、研究1では、幼児の自己実現と社会的行動(攻撃行動・抑うつ行動・向社会的行動)との関連を検討することにより、幼児の自己実現と社会的不適応との関連を明らかにすることを目的とする。また、研究2では、幼児の自己実現と社会的行動との関連を縦断的に検討することを目的とする。

## 研究1 方法

自己実現と社会的行動(攻撃行動・抑うつ行動・向社会的行動)の関連

自己実現評定尺度(教師評定)

自己実現尺度 マズローの提唱した15項目(現実の認知、受容、思考・感情行動の自発性、課題中心性、プライバシー要求、自律性、様々な物の鑑賞、神秘的経験の有無、同一視の感覚、親密な関係の有無、民主的な性格構造、倫理観、ユーモア感、創造性、批判的態度や抵抗)を実際の保育現場や幼児の様子と合致する内容に修正した。また、修正した自己実現尺度の各評定項目に関して、担任教師に、「全くそう思う」～「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。社会的行動評定尺度(教師評定)

幼児の社会的行動評定尺度(教師用)[Preschool Social Behavior Scale-Teacher](Crick & Grotpeter, 1995)と児童の社会的行動評定尺度(教師用)[Childrens Social Behavior Scale-Teacher](Crick, 1996)をもとに、幼児の社会的行動尺度(教師用)を作成する。

その際、日本での使用が可能なよう、一部表現を変え、攻撃行動を測定する項目16項目(例、自分の言う通りにしなければ、遊びのグループからはずすと言う)、抑うつ/孤立を測定する8項目(幼稚園で友だちと遊べないため、一人ぼっちで寂しそうである)、向社会的行動を測定する項目8項目(例、怪我をしている友だちを見たら慰める)、を使用した。

対象：幼稚園年長児137名

手続き：幼稚園教諭に、担当クラスの子どものついて、前期4月～7月までを通しての自己実現と社会的行動を「全くそう思う」～「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。評定される子どもは、年長児137名であった。

## 結果・考察

社会的行動尺度の因子分析

社会的行動の評定32項目について因子分解(主因

子法・バリマックス回転)を行った。この際、固有値の推移、累積寄与率・因子の解釈可能性を考慮して3因子を抽出した。また、因子負荷量.7未満の8項目を削除した。計22項目について再び因子分析を行ったところ、同様の因子パターンが確認された。第一因子は仲間との相互作用の中での攻撃的傾向をあらわしており、攻撃性因子として解釈した。第二因子は、仲間との相互作用に参加できないなどの抑うつ傾向を示しており、抑うつ因子として解釈した。第三因子は、仲間との相互作用の中での向社会的傾向を表しており、向社会的因子として解釈した。

本研究の結果から、先行研究(Crick & Grotpeter, 1995)と同様の3因子が抽出された。信頼性を検討するため、クロンバックの $\alpha$ 係数を求めたところ、第1因子が0.95、第2因子が0.92、第3因子が0.66であり、ほぼ満足する値が得られた。従って、攻撃行動が13項目、向社会的行動が3項目、抑うつ行動が6項目の計22項目を、社会的行動尺度の質問項目として用いることとした(Table1)。

### 自己実現得点と社会的行動(攻撃・抑鬱・向社会的)の関連について

全被験者の上位・下位約25%を、自己実現得点の高群と低群として抽出した。Figure1は、自己実現得点の高群(N=33)と低群(N=33)の、社会的行動の下位尺度(攻撃行動・抑うつ行動・向社会的行動)得点の平均を示したものである。また、抑うつ行動と向社会的行動については、分散の大きさが等質とみなせないで、ウェルチ法によるt検定を行った。

その結果、全ての得点で有意な差が見られ、「向社会的」得点は自己実現高群が低群よりも高かった( $t=6.31$   $df=58$   $p<.001$ )。また、「攻撃」得点は自己実現高群が低群よりも低く( $t=2.30$   $df=64$   $p<.025$ )、「抑うつ」得点は自己実現高群が低群よりも低かった( $t=3.36$   $df=56$   $p<.001$ )。

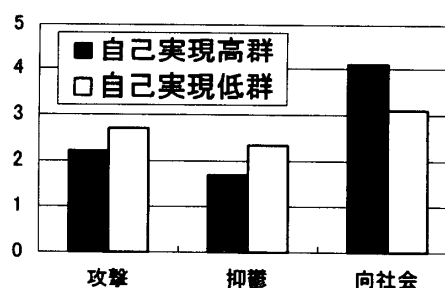


Figure1 自己実現高群・低群の社会的行動得点

Table1 社会的行動尺度の因子分析

項目	因子 攻撃	因子 抑うつ	因子 向社会的	多重 R <sup>2</sup> 乗
項目1 ある友だちが自分の言うことをきかなければ、その子と一緒に遊ばないと他の友だちに言う	0.865	0.005	0.131	0.832
項目2 ある友だちと遊ばないように他の友だちに言う	0.818	-0.163	0.081	0.821
項目3 ある友だちに腹を立てた場合、その友だちを遊びのグループから外ないようにする	0.789	-0.237	0.179	0.751
項目5 友だちに意地悪をしようとして、けつたり、たたきたりする	0.796	0.083	0.088	0.703
項目8 欲しい物を手に入れるために、「ぶったり、たたきたりする」と言う	0.802	0.329	-0.032	0.869
項目10 腹を立てると、友だちの物を壊す	0.800	0.265	0.076	0.817
項目11 望んだことをしてくれなければ、幼稚園が終わってから一緒に遊ばない家や公園等と言う	0.765	0.368	0.033	0.777
項目13 友だちよりも先におもちゃを使いにくい場合、友だちを乱暴に押しつけたり、つついたりする	0.755	0.339	-0.137	0.759
項目17 他の友だちにある友だちを嫌いになるように指示する	0.805	0.011	0.046	0.736
項目19 意地悪をしようとして友だちをつねる	0.771	0.288	0.102	0.738
項目21 自分の言う通りにならない場合は、遊びのグループからはずすと言う	0.824	0.162	0.054	0.783
項目24 欲しい物を得るために、友だちをたたきたり、言葉で脅したりする	0.802	0.236	-0.041	0.749
項目32 友だちの持ち物(服、作った作品)を見てからかう	0.725	-0.035	-0.064	0.668
項目6 幼稚園で楽しくなさそうである	0.195	0.733	0.296	0.723
項目9 幼稚園で悲しそうにしていることが多い	0.182	0.832	0.078	0.741
項目16 幼稚園で一人で遊んだり、うろろしたりしていることが多い	0.007	0.891	-0.020	0.792
項目22 幼稚園で自分は一人ぼっちであると感じているようである	-0.003	0.803	0.157	0.651
項目28 幼稚園で友だちと遊べないため、一人ぼっちで寂しそうである	0.201	0.871	0.085	0.800
項目30 幼稚園でかなりの時間一人でいることが多い	0.103	0.865	-0.051	0.813
項目12 けかをしている友だちがいいたら、先生を呼ぶ	0.006	-0.109	-0.822	0.511
項目23 怪我をしている友だちを見たら慰める	-0.200	-0.185	-0.806	0.534
項目29 友だちがいじめられている時、その友だちを助ける	0.008	0.021	-0.622	0.434
説明済	8.364	4.906	1.952	
寄与率	0.380	0.223	0.089	
$\alpha$ 係数	0.95	0.92	0.66	

この結果から、自己実現得点が高いと評定された子どもは、自己実現得点が高いと評定された子どもと比べて向社会的行動が多く、攻撃行動や抑うつ行動が少ないことがわかった。

このことから、自己実現傾向が高い子どもは向社会的で仲間との関係を良好に保つことができる一方、自己実現傾向の低い子どもは、攻撃的・抑うつ的で仲間との関係を良好に保つことが困難であると考えられる。従って、攻撃行動などの反社会的行動や抑うつ行動などの非社会的行動を示す社会的不適応状態は、自己実現する際の妨げとなることが伺える。

## 研究2

研究1では、幼稚園生活で日常見られる社会的行動と、自己実現との関連について検討した。その結果、幼児の自己実現と幼稚園生活でみられる行動(社会的行動)との間に関連が見られ、自己実現している子どもは自己実現していない子どもと比べて、向社会的な行動が多く、攻撃行動や抑うつ行動が少ないことがわかった。こうした自己実現と社会的行動の関連の傾向は、発達に伴って変化するのであろうか。社会的・認知的発達が著しい幼児期(藤崎, 1992)では、自己実現傾向や社会的行動に変動がみられることが予測される。

従って、研究2では、幼児の自己実現および社会的行動を発達の的に検討する。そこで、保育者に担当園児の自己実現および社会的行動について7月(前期)と3月(後期)に測定してもらい、前後期の自己実現と社会的行動との関連を比較することにより、幼児の自己実現および社会的行動が1年間でどのように変動するのかについて検討する。

## 方法

自己実現尺度(教師評定)と社会的行動尺度(教師評定)は、研究1と同様。

対象:幼稚園年長児101名(研究1の対象者から1クラスを除外)

手続き:幼稚園教諭に、担当クラスの子どものついて、子どもの社会的行動について「全くそう思う」～「全くそう思わない」の5件法で尋ねた。  
調査時期:前期4月～7月の子どもの様子(研究1同様)、後期9月～3月の子どもの様子を評価するようそれぞれの時期に1度ずつ、調査を依頼した。

## 結果・考察

### 後期の自己実現得点と社会的行動(攻撃・抑うつ・向社会)の関連について

Figure2は、後期の自己実現得点の高群(N=23)と低群(N=28)の、社会的行動の下位尺度(攻撃行動・抑うつ行動・向社会的行動)得点の平均を示したものである。

t検定の結果、全ての得点で有意な差が見られ、「向社会的」得点は自己実現高群が低群よりも高かった( $t=6.76$   $df=49$   $p<.001$ )。また、「攻撃」得点は自己実現高群が低群よりも低く( $t=4.30$   $df=49$   $p<.001$ )、「抑うつ」得点は自己実現高群が低群よりも低かった( $t=4.21$   $df=49$   $p<.001$ )。この傾向は、前期と同様の傾向であった(研究1, Figure1参照)。

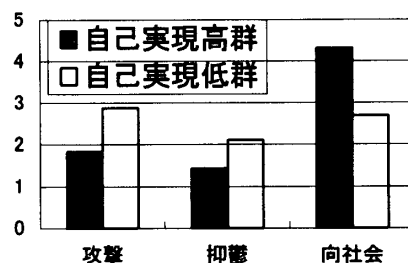


Figure2 後期の自己実現高低群の社会的行動の下位尺度得点

### 前期と後期の自己実現得点の比較

前期と後期の自己実現の得点を比較するため、自己実現得点を従属変数としたt検定を行った。その結果、自己実現得点において、有意な差が見られ、後期が前期よりも自己実現得点が高かった( $t=4.12$ ,  $df=236$ ,  $p<.001$ )(Figure3)。

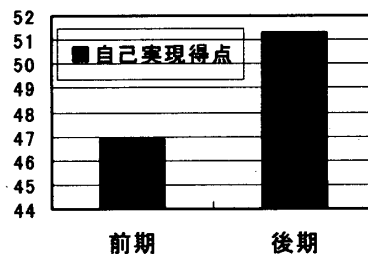


Figure3 前後期の自己実現得点の比較

以上の結果から、1年を通じて一貫して自己実現が高い子どもは向社会的行動が多く、自己実現が低い子どもは攻撃行動と抑うつ行動が多いことがわかった。また、自己実現傾向は学年末に高くなることが示された。

このことから、自己実現傾向の高い幼児は向社会的で仲間関係への適応がうまくいっている幼児であり、自己実現傾向の低い幼児が、攻撃的で抑うつ的な社会的不適応状態にあることがわかった。自己実現が社会的行動を規定するのか、社会的行動が自己実現を規定するのかは明確ではないが、幼児の自己実現と社会的行動とは深く関連していることが示唆された。

また、学年末に自己実現得点が上昇していたことは、向社会的で仲間の中で適応している幼児だけでなく、不適応状態にある幼児でさえも自己実現傾向が上昇していることを示唆している。良好な仲間関係が幼児の高い自己実現を可能にすると同時に、不適応状態にある子どもでさえも、個人内レベルでは自己実現が加齢に伴って上昇している可能性があることを示唆している。このことから、自己実現は「仲間との活動」と「個人での活動」の両側面から捉える必要があることが示唆される。

## 総合考察

研究1の目的は、幼児の自己実現と社会的行動との関連を明らかにするため、自己実現の高い子どもと低い子どもとではそれぞれの社会的行動(攻撃行動・抑うつ行動・向社会的行動)にどのような違いがみられるのかを検討することであった。

研究1の結果から、自己実現傾向の高い子どもは向社会的で仲間との関係を良好に保つことができる一方、自己実現傾向の低い子どもは、攻撃的・抑うつ的で仲間との関係を良好に保つことが困難であることが示された。

次に、研究2の目的は、自己実現得点の発達的变化と、それに伴う社会的行動の変化を検討することであった。

研究2の結果から、自己実現の高い幼児は、自己実現の低い幼児よりも、向社会的で非攻撃的かつ非抑うつ的であり、このような傾向は1年を通じて変化しないことが示された。また、自己実現得点は学年末になると上昇することが示された。

以上の結果をまとめると、以下の4つのことが明らかになった。まず第一に、自己実現傾向が高い

子どもは、仲間との相互交渉の中で向社会的行動が多く、仲間との関係が良好状態にある。第二に、自己実現傾向が低い子どもは、仲間との相互交渉の中で攻撃的で抑うつ的な行動が多く、不適応状態にある。第三に、上記の自己実現と社会的行動との関連は1年を通じて変化しない。第四に、自己実現の全体的なレベルは学年末になるに従って上昇する。

このことから、幼児が自己実現する際には、仲間との相互作用場面での社会的行動や仲間関係が深く関連することが示唆された。つまり、仲間関係を良好に保つことができる幼児は、仲間との遊びの中で自分をありのままに表現・発揮し、自己の思いや願いを十分に実現していると考えられる。従って、幼児が自己を実現する際には、充実した仲間関係が必要不可欠であることが示唆された。よって、仲間の中で不適応状態にある子どもは、自己の思いや願いを十分に実現できずにいると考えられる。

それでは、攻撃的行動や抑うつ的な行動が多いため、仲間の中で不適応を示す子どもの自己実現はどのように考えていけば良いのだろうか。どの幼稚園にも大人から見ると、何もしていないように見える子どもや、生産的な活動を全くしないと思われる子どもが存在する。また、子どもの行動特徴と仲間関係を検討した研究によると、相手に対して攻撃したり、反対に引っ込み思案になることで仲間から受け入れられず、孤立し(Hartup, 1974 など)、深い孤独感を感じてしまう子どもも存在する(前田, 1995)。

自分では友達の中に入って一緒に遊びたいのに、仲間入りが出来ずに遊べない子どもや、仲間に入りたくても仲間を受け入れられず、仲間との遊びに参加できない子どもは、“遊びたい”という自己の思いや願いを実現できずにいる。また、他の人の作ったものを壊す、他の人をたたく、などの反社会的な問題行動は、自己実現とは言いがたいものである。しかし、個人差という観点から、これらの行為は自己実現そのものではないが、その子どもにとっては自己実現に至る過程において、必要不可欠であり、その子どもなりに自己実現しようとしている姿と捉えられる(広島大学附属幼稚園, 1991)。孤立行動のような非社会的行動は、大人の目には非生産的で何もしていないように見えるかもしれない。しかし、空想にふけている子どもや、ほかの子どもの遊びをよく観察している子どもは、他者を見ることを通して、仲間や外界とかかわりながら、自己のイメージを構築しており、そうすることで自分に対する不

満は少ないものと思われる。津守真は、このような自己実現のあり方を「虚の自己実現」と呼び、何かを作り出す遊びに見られるような「実の自己実現」と対比させ、「虚の自己実現」にも大いなる意味を見出している。保育者はそうした姿を受容し、何らかの方法でそれを満たす援助をする必要があると思われる。

本研究の結果は、社会的適応がなされない子どもは自己実現傾向が低いことを示した。しかし、この結果は「虚なる自己実現の姿」が反映されていない可能性があると考えられる。ここに本研究の反省すべき点があり、自己実現の測定が相対評価で行われことが原因であると考えられる。

本研究では、相対評価によって幼児の自己実現を測定した。自己実現とは本来、自己の中の絶対評価であるため、自己実現の評価は他者との比較から生まれるべきものではない。つまり、自己の内に秘める思いや願いを実現させているかどうかである。ここで相対評価を用いたことで「虚なる自己実現の姿」を見えなくしてしまった可能性がある。

そのため、自己実現が低いと教師に評価された子どもであっても、自己の思いを彼らなりに実現させていたのかもしれない。前述したように、攻撃行動は自己実現するための前段階である場合や、一見抑うつ行動と見える行動であっても「虚なる自己実現」である場合も考えられる。そのため、生産的な形での自己実現は見られないが、自分なりの自己実現を行う子どもは、攻撃的・抑うつ的な行動が多く見受けられ、それを他者が相対評価したことで、このような結果になった可能性がある。その証拠として、自己実現得点は学年末になるにつれて向上していた。つまり、自己実現の高い幼児も低い幼児も個人内では自己実現が向上していると考えられる。よって、今後は絶対評価を行うなど新たな評定法を開発し、幼児の自己実現を捉える必要があると思われる。

## 引用文献

- Crick, N.R. 1996 The role of overt aggression, relational aggression, and prosocial behavior in the prediction of children's future social adjustment. *Child Development*, 67, 2317-2327.
- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995 Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment. *Child Development*, 66, 710-722.
- 藤崎 真知代 1992 人間関係の発達 藤崎 保 (編) 現代の発達心理学 有斐閣
- Hartup, W.W. 1974 Aggression in childhood: Developmental perspectives. *American psychologist*, 29, 336-341.
- 広島大学附属幼稚園 1991 幼児一人ひとりののびやかな自己実現を支える保育—幼児差ながらの生活を見つめて—, 幼児教育研究紀要, 14, 1-15.
- 前田 健一 1995 仲間から拒否される子どもの孤独感と社会的行動特徴に関する短期縦断的研究 教育心理学研究, 43, 256-265.
- 上田 吉一 1988 人間の完成—マズロー心理学研究, 誠信書房
- 山崎 晃 1999 保育者は幼児の自己実現の姿をどのようにとらえているか 日本発達心理学会10回大会発表論文集 358.
- 山崎 晃・白石敏行 1993 幼児の自己実現を自己主張と自己抑制からとらえる 保育学研究, 31, 104-112.

## 謝辞

本研究にあたり、ご協力を賜りました広島大学附属幼稚園、広島大学附属三原幼稚園の諸先生にこころより感謝申し上げます。

本研究は平成10・11・12年度科学研究費基盤一般研究(c)「幼児期から思春期までの自己実現獲得に関する教育心理学的実践研究」(課題番号10610121)による。